



魚と漢字と絵を 媒介にした



古くて新しいカードゲーム



魚編に「青」と書けば鯖(サバ)、「弱」と書けば鰯(イワシ)。
 鱒、鯨、鮭、鮪、鰯、鰈、鱒、鯛、鱈、鰻、鯨など
 魚の名前を漢字で綴れば、その魚の特徴とともに
 日本人がその魚に抱く印象が端的に表現されていることに気づく。
 絵柄の美しさと魚介類の種類や漢字の勉強になることから
 ファミリー層を中心に人気を集めているカードゲームがある。
 色紙や千代紙の切り絵を使って、カードに和のテイストを盛り込み、
 グッドデザイン賞を受賞した絵あわせカルタ「魚(とと)あわせ」だ。
 その誕生エピソードやシリーズ化の理由などのお話を伺うため
 京都府宮津市の水族館の中にある発売元の「魚(とと)工房」を訪れた。

上に並べたカードの絵柄は「加賀・能登版」の札。
 下の箱は記念すべき第一弾「京都丹後版」。





京都府宮津市にある日本海に面した、水族館と研究施設から成る宮津エネルギー研究所「丹後魚っ知館」。



「鯨あわせ」を企画した宮津エネルギー研究所水族館館長で学芸員の吉田史子さん。



株式会社環境総合テクノス「鯨工房」専任スタッフの原口宏美さん。

関西電力宮津エネルギー研究所 「丹後魚っ知館(たんごうおっちゃん)」

京都府宮津市にある、見て触れて学べる水族館。丹後の海にいる魚たちが、27もの水槽で鑑賞できる。水族館は入場300円(小人150円、幼児無料)。エネルギー展示室・魚っ知コーナー・タッチングプール・喫茶/売店コーナーは無料。



<http://www.kepco.co.jp/pr/miyazu/>

◆「京の良いもの市」～丹後・丹波・山城ふるさと物語～◆

場所: 京都太秦映画村 中央広場
期間: 11月23日(金)～25日(日) 時間: 9時～17時

◆ 鯨あわせ原画展 ◆

場所: 丹後魚っ知館 魚っ知ギャラリー
期間: 12月1日(土)～12月24日(月)
休館日: 毎週木曜日 開館時間: 9時～17時
魚っ知館案内電話: 0772-25-2026 原画展の入場料: 無料



株式会社環境総合テクノス
鯨(とと)工房
<http://www.totokobo.com/>

多彩な食文化を反映する、 複数の名前を持つ日本の魚

世界で約24,000種類、日本では約3,900種類の魚が知られている。それらの魚たちのすべてに学名や標準和名、地方名などがある。また、同じ名前でも地方によってまったく異なる魚であったり、同じ魚が地方によってまったく違う名前と呼ばれていたこともある。九州の有明海や八代海にしかないムツゴロウのような地方独自の魚もいる。ブリやズキ、ボラのように成長に従って呼び名が異なる「出世魚」もいる。

成長の過程でも地方によって呼び名が異なるのだから、魚の名前は興味深い。たとえば関西で「メジロ」と呼ばれる魚は、

富山では「ガンド」の名前で親しまれているが、成魚になればどちらも「ブリ」と呼ばれる。ひとつの種類の魚に複数の名前がついているのは、日本列島を囲む各海域で魚の生息状況や旬の時期が異なり、それぞれの魚が地方の食文化と親密な関係のあることの表れともいえる。

日本人に馴染みの深い魚介類を地域別に集め、魚偏の漢字と色とりどりの千代紙や色紙の切り絵を使って生まれた絵あわせカルタが人気を集めている。「鯨(とと)工房」が企画・製作した「鯨(とと)あわせ」だ。朱色や群青色など日本の伝統色を用いた箱、千代紙の繊細な模様を取り込んだこのカルタは、和のテイストに貫かれたデザインだ。札には魚介類のミニ知識が添え

られている。販売合計個数は2003年春の発売以来10万個を突破し、ロングセラー商品として定着し始めた。2005年にはグッドデザイン賞、2006年にはグッド・トイ賞(※1)も受賞した。現在、地方別に10種類が販売されている。最新版は11作目となる「琵琶湖・淀川水系版」で、初めての淡水魚版だ。

“カニ博士”の切り絵が弾み。 ネーミングは魚をさす 幼児語の「とと」から

「鯨工房」は、株式会社環境総合テクノスが管理・運営を受託している京都府宮津エネルギー研究所水族館「丹後魚っ知館」の中にある。

※1 日本グッド・トイ委員会が、市場にあふれるおもちゃの中から優良なおもちゃ「グッド・トイ」を選び、普及させることを目的に1985年に制定した賞。



切り絵を制作中の在りし日の篠田正俊さん。「鯨あわせ」のクリエイティブ面を支えた篠田さんは、京都大学大学院農学研究科博課程卒業の農学博士。専門分野は海洋漁業生物学。東南アジア漁業開発センター勤務後、千葉大学理学部助教授を経て、京都府立海洋センターに勤務、1999年まで海洋センター所長を務め、「カニ博士」の名で親しまれる。退職後、「環境総合テクノス」の環境評価部長に就任。2006年他界。



「水族館を運営する中で何か面白いことや楽しいことができないかと考えたのが製作のきっかけ」と話すのは、水族館館長で学芸員の吉田史子さん。

「最初はまったくの雑談からのスタートでした。魚の飼育には自信があっても、商品開発は誰もが未経験。ランチを取りながら、アイデアを投げあう中で思いついたのが魚のカルタだったんです」

3名でスタートしたこの思いつきがかたち変わったのは、昨年惜しまれながら亡くなった“カニ博士”こと故・篠田正俊さんのクリエイティブ能力によるところが大きい。環境総合テクノスの環境評価部長を務めていた篠田さんは、「鯨あわせ」の切り絵を担当した。

「魚のカルタを作ろうというミーティングは2002年秋から行っていました。その年末に興味で魚の切り絵などをしてきた篠田さんに協力を依頼したところ、年明けに14種類の切り絵ができてあがっていました。それで製作に弾みがつきました」

カードの色や紙質、外箱のデザインは固まっていったものの、商品名は最後まで

決まらなかった。「大魚林」「お魚大辞典」「おさかなあわせ」など多くの候補が挙がったという。

「どれも今ひとつで、悩みました。しかし魚にはこだわりがあった。魚のことをこの辺りでは<とと>といいます。それで魚と魚をあわせる語呂合わせから、魚魚と書いて<とと>と読ませる『鯨あわせ』が誕生したんです」そして商品名にあわせるように「鯨工房」が誕生した。

地方色を強調して 手ごたえをつかみ、 以降続々シリーズ化

商品開発だけでなく、商品の販売促進も初体験だった吉田さんは、2003年の「鯨あわせ」発売前夜を振り返る。

「ある程度完成のめどは立ってきたのですが、すべて勢い。売り方ひとつまったくわかりませんでした。それで旅館やお土産組合の会合でプレゼンさせてもらい、販路を確保するとともに、発売を春休みに入る3月20日に決め、新聞やテレビなどでも取り上げてもらいました」

当初の製作個数は5,000個。水族館のバックヤードの廊下に山積みになった

ダンボールの山を見て「10年でさばき切れるやろか」と不安になったというが、京都丹後地方に馴染みの深い魚たちを集めた「京都丹後版」は、夏休み前にはすべてを売り切ることができた。

そして32種類のうち8種類を越前・若狭地方で親しまれている魚に替えた「越前・若狭版」を皮切りに、次々に地方版を発売。江戸前寿司のネタに特化した「江戸前版」や英語バージョンの「Sushi Bar」など新たなアイデアも盛り込み、シリーズ化してきた。

吉田さんはシリーズ化にあたり、地方色を強調し、ディテールにこだわっていると話す。

「版を重ねながら徐々にローカル色が強くなってきたように思います。地方による食べ方の違いや郷土料理なども盛り込み、それぞれの特色を打ち出しています。また、たとえば同じイカでもそれぞれの地方にゆかりのあるように、アオリイカやスルメイカといった風に種類を変えています。もちろん、図柄もさまざまなバリエーションになっています」

地方版ごとにその地方独自の“隠し味”が使われているのである。

※2 平安時代に始まった二枚貝の貝殻をあわせる遊びで、日本のカルタの起源。殻の内面に紙を貼り、「源氏物語」などの絵を描き、金箔などで極彩色に仕上げ、左右一対の殻に同じ絵を描いた。

魚と漢字と絵を媒介としたコミュニケーションツール

「ターゲットを絞って制作したものではないんです。作りたいという思いだけで、どんな人が購入するのかを想定できないまま作ってしまいました。でも、それが幸いし、絵のきれいさに惹かれる若い方から孫と遊びたいお年寄りまで多くの人に支持されてきました」と吉田さんは語る。老若男女問わず遊べるのが「鯨あわせ」の魅力のひとつだ。絵あわせだけでなく、神経衰弱やババ抜きもできる。

2004年から「鯨工房」専任スタッフとしてかわる原口宏美さんは「きれいで楽しいということだけでなく、遊びの中から魚を知り、そして水や環境のことを知るきっかけになってくれれば」と話す。今後、全国版や他のシリーズも検討中だ。原口さんは「鯨あわせ」だけでなく、魚を身近に感じてもらえるものをみんなでアイデアを出し合いながら創り出していきたい」と抱負を語る。原画展も順次全国で開催していく予定だ。

季節や地域によって旬の時期や呼び名が異なる魚。約3200年の歴史を持つ

漢字。貝あわせ(※2)から始まった日本のカルタ。この三者が集まったことで、誰もが親しめるゲームが誕生したのである。

しばらくすればクリスマスシーズン、そして正月がやってくる。「鯨あわせ」を使って家族で遊ぶもよし、友人と魚の絵を肴にそれぞれの出身地方の呼び名や調理法など、魚談義に花を咲かせるのもよし。「魚」と「魚」をあわせるこのカードゲームは、「人」と「人」を遊びでつなく、古くて新しいコミュニケーションツールなのである。

Text by : 夏沢冬樹

「鯨あわせ」全11作



京都丹後地方で馴染み深い魚を集めた第一弾「京都丹後版」。華やかな都を偲ぼせる朱色の箱に萌黄色の札。



地理的に京都丹後の隣に位置する「越前・若狭版」は、若狭の深い海を思わせる藍色の箱。札は群青色。



“天然のいけす”富山湾の魚を集めた「越中富山版」。箱に描かれているのは全身が青白く光る名物「はたるいか」。



対馬暖流・季節風の影響を受ける加賀・能登周辺の魚を集めた「加賀・能登版」。箱に描かれているのは甘エビ。



変化に富む海岸線をもつ山陰・但馬地方で馴染みの魚を集めた「山陰但馬城崎温泉版」。美しい桃色の箱。



島根半島と隠岐島周辺で見られる魚を集めた「隠岐・出雲・石見版」。箱の絵は宍道湖七珍味のひとつ大和しじみ。



暖かい海水と熱帯の生物を運んでくる黒潮によって豊かな漁場が広がる紀州周辺の魚を集めた「紀州和歌山版」。



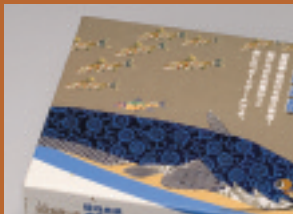
英語バージョンの「Sushi Bar」はポストカードのおまけ付き。海外へのお土産として大好評。希望小売価格1,890円。



河川から流れ込んだ栄養がたくさん含まれた海水で育った魚たち。穏やかな内海に住む魚を集めた「瀬戸内版」。



江戸前寿司のネタに特化した「江戸前版」。赤貝、穴子、鮑などおいしいような魚介類が勢ぞろい。



最新版は11作目となる「琵琶湖 淀川水系版」で、シリーズ初の淡水魚版。

※「Sushi Bar」以外すべて希望小売価格1,260円。

カードゲーム「鯨あわせ」の特徴と遊び方

仕様

基本的には魚32種のカードが左右に分かれている。32種×2=64枚+吉札、凶札(ババ)が追加される。

特徴

- ・魚偏の漢字一文字を偏とつくりに分けて、字合わせになるように構成。
- ・切り絵の絵あわせになるように構成。
- ・右札表面に簡単な魚の特徴の説明入り。
- ・漢字の読み方は、ひらがなとローマ字表記の併記。

遊び方

- ・**神経衰弱**…すべてのカードを裏返しにして、2枚のカードをめくる。
- ・**カルタ**…魚偏のカードを表にして並べ、読み手がつくりのカードを読み上げ、取り手は読み上げられたカードにあう魚偏のカードを見つける。
- ・**ババ抜き**…ババカード(骨カード)が入っているので、トランプのババ抜きの要領で遊ぶ。
- ・**絵合わせ**…幼児向け。すべてのカードを表に向け、重ならないように広げて絵あわせとして遊ぶ。